2013年12月15日 神戸新聞朝刊

神戸新聞　（第3種郵便物認可）

学生 農業に夢と情熱

西宮北部 農家の指導受け取り組み

西宮市内の2大学の学生が、市北部で農業に取り組んでいる。地元農家から指導を受け、慣れない土いじりや重労働にあくせくしながら「育つ姿がいとおしい」と夢中。農業をビジネスとしてとらえ、休学して会社設立を目指す学生も現れた。今なぜ、農業なのか―。若者たちに取材した。（斉藤絵美）

西宮市北部・鷲林寺。ジーンズに長靴をはいた若者5人がほうれん草の植わった畑で、汗を流していた。農家の高田孝さん(64)が時折、声を掛ける。

甲南大マネジメント創造学部（西宮市）の学生でつくる団体「アグリスタ」。高田さんから6畝を借り、無農薬で野菜を作る。中心的に活動する3年5人は、秋から休学するなどして農業に懸ける。

1年前、授業の一環で米作りを通して販売計画を立てる「農業インターンシップ」に参加したことがきっかけだった。代表の金子隆耶さん(20)は「農業に抱いていた『ださい、収入が低い、田舎』のイメージが変わった」。

食卓に食事が並ぶまでの過程に、多くの人が関わっていることを実感。ぶっきらぼうだった農家のおっちゃんが共に作業を重ねると、笑顔に変わった。高齢化や耕作放棄地の増加などの課題に「若者が動けば解決する」と金子さんは仲間に呼びかけた。

ベンチャーに興味があったが、自動車関連企業への就職に固まりつつあった加藤佑樹さん(21)は「農業で起業する。夢を目指していた気持ちを掘り起こされた」とし、親を説得して活動に加わった。

「自分には就活を戦う武器がない」と感じて働くことを学ばせたいと呼び掛けて発足。市に相談して、地元農家から農地を借りた。

今では、地産地消を学ぶ藤田教授のゼミ生も含め2～4年の15人が週1回、活動する。天候が変われば計画を変更せざるを得ない。「楽しむだけでなく、対応能力を学ぶ機会にもなる」と藤田教授。

3年の師橋美寿さん(21)は「何かを育てる、ということに興味があった。育てた野菜は何となくおいしく感じる」と笑う。

作物を市南部で販売し、都市部と農村部を結ぶ取り組みにも力を入れる。今後は船坂の活性化にもつなげていくという。

地元農家から教わりながら農作業に励む甲南大「アグリスタ」のメンバーたち＝西宮市鷲林寺

甲南大のグループ ビジネス化目標 ／ 大手前大のサークル 作物の販売も

鷲林寺から六甲山系を越えた山口町船坂では、大手前大(西宮市)の学生たちでつくる農業サークル「ポマト」が畑を耕す。

2年前、同大現代社会学部の藤田昌弘教授が、学生に汗を流していた清水駿さん(21)は「とりあえず1年。自分のお金で時間を使って将来どうするか決めたい」。

金子さんらは来年3月の会社設立を目指す。地元農家と契約し地場野菜を流通させるビジネスや、耕作放棄地の活用などを展開したい考えだ。「農業をする学生としてロールモデルになりたい」と意気込む。

■